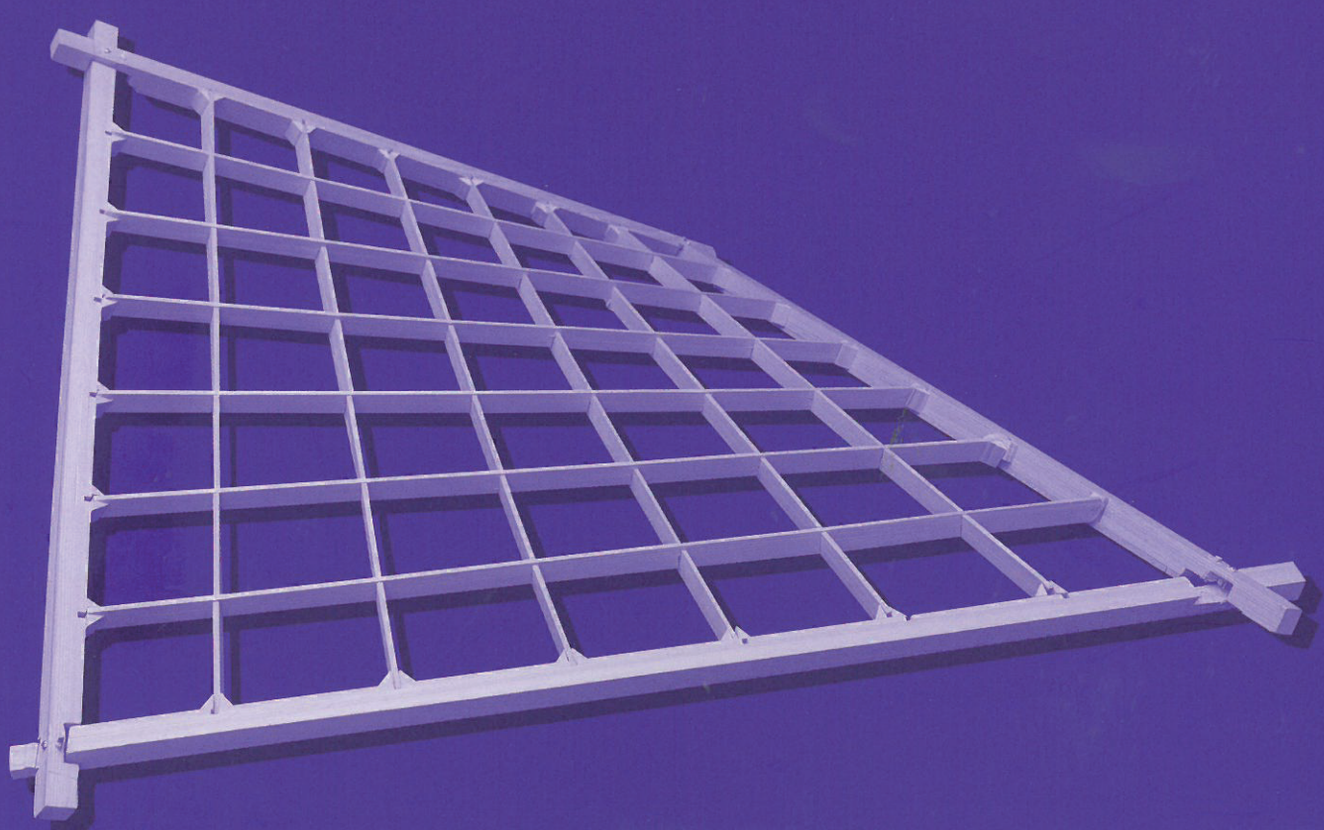
伝統木構法に学ぶ

# 構造と意匠の融合

増田一眞 著



# 増田一眞先生の伝統木構造

神田 順

増田先生には、かつて私が日本建築学会で雑誌編集委員会に属していたときに、筑波第一小学校体育館の設計者解説を1988年にお願いしたことがある。木造骨組みは、だいたい架構が現しになることが多く、なにもCGで描かなくても良いと言われるかもしれないが、構造パースペクティブとして、構造躯体としての木造の特徴を、RC造やS造と対比して示したかった。力の流れは、RC造よりもS造よりも、良く見えるように思う。

改めてお会いするようになったのは、私たちが2003年から建築基本法制定の運動を進めていることが伝わり、今の建築の法体系では、伝統木構造が法的に位置づけられていないことから、一緒に社会的アピールが出来ないかということで、伝統木構造の方々とお会いした、2009年の12月からのことである。

構造架構を考える知恵に基づく、先生の長年のご活躍と活動に徐々に触れながら、それからは比較的頻度高く接する機会をいただいている。先生は、すでに1998年に「建築構法の変革」を著され、それ以後も木造を主として、今日までの架構技術を後世に伝えるべく「架構のしくみで見る建築デザイン」(1999年 彰国社)や「蘇る美しい日本建築　新伝統木構法の展開」(2005年 東洋書店)を出版されている。他にも教科書用に綴ったものを、いくつか整理されており、このあたりで再度まとめておきたいとの思いを持たれたようであった。編集にあたっては、若干のお手伝いもさせて頂いた。というより、先生のお話を直接に、何度か聴く機会をもつことが出来たということである。

伝統木構造が法律にちゃんと位置づけられていないということが、伝統技能継承への妨げになっている。法律が、そのように作用することは宜しくない。戦後、経済成長が思いのほかうまく行き、経済的には豊かな国の仲間入りをした日本であるが、市場経済が大きな力を持つようになると、職人技は、評価されにくくなる。割高になって、大量生産品に押し出されがちである。建築は、誰もが建築主になれるだけに、社会制度として、何を法律で規制して、何を専門家が律して行くかの、本質的仕分けは結構難しい。

法規制というものは、全国一律であり、また技術的に微妙なところを、明解な仕分けをして規定するという性質をもっているので、そもそも、職人がその土地にあった木を見て判断して、細工すると言うことになじまない面がある。社会が何に価値をおいて生活を展開するかである。経済活性化一筋ということになると、職人が技で勝負するよりは、工業製品や、誰でも同じ答が出る組み方が、全体を制してしまう。

技術を受け継ぐ者、技術の成果を享受する者、それぞれの思いも大切であるが、社会が評価するための努力も求められる。そのためには、社会そのものを、教育のあり方も含めて、しっかりさせて行かなくてはいけない。単に消費社会のコマーシャリズムに身を任せて、法律に生活を委ねて、ただ日を送るのではないことを、教育を通して伝える必要がある。生活の中のどこに価値を見つけるか自ら考えて、生活の質を自らつくり上げていく社会こそが、豊かさをもたらしてくれると言えるからである。そこに、伝統木構造が生かされる場があるのではないか。

木構造は、何よりも、設計者が木を知らなくてはいけないし、また架構の技術への理解がないと設計できない。当然ながら、そのような技術は、実際の経験を積んで初めて可能になるものであるとはいうものの、本書のような形で、整理され、先生の声が聞こえてくるようであると、さまざまな発想の原点になることが期待できる。模型で木を組んでみて、どのように力が伝わり、変形が生ずるかを、一つひとつ手で確かめるということの意味は、このようにして解説していただくと、実感に近付くことができる。

事例紹介は、先生の思いが、一つひとつの架構に込められていることを感じ取れるものである。もちろん、木造設計者に限らず、構造設計の基本を読み取るにあたっても、あるいは、構造と空間を思いめぐらすにおいても、入門者からベテランまで、十分に味わってもらえる内容・構成となっている。

先生もどこかで書いておられたが、井上ひさしの「ボローニャ紀行」は、職人技が今日の市場競争の世界にあっても、評価され続けていることの意味を伝えてくれる。そこには、まちのあり方を、生き方を、そこに住む人たちが、自分たちにとって何が大切かを考えて、判断し、行動しているという世界がある。

大量生産品に囲まれていることは現代の象徴でもあり、また市場経済の中で、物の価値を自分で考えるよりは、市場の貨幣価値で評価することに慣らされてしまっている。無用なものを購入してしまったり、ほんの一部の不具合で、すべてを取り替えたりということが、ある意味、経済活性化の一助になっていたりする。そうではなくて、良いものを長く使うことが心地良いという思いが、伝統木構造の価値を高めてくれることを期待する。

もちろん、プレカットによる木材料加工が効率化や安定品質をもたらした面は評価しなくてはいけないが、同時に、仕口加工を手作業で行う技能者を減らしたことも事実である。コンピュータを、プログラムをつくって利用した時代と、市販のプログラムを使うことの違いである。ある程度はブラック・ボックスでも良いとしないと、何もできない時代ではあるが、自分で意味を理解して使う心掛けは重要である。

森林に恵まれた我が国で、持続可能な林業から建築までの流れの、今ひとたび全体も見据える議論がされて、少し明るい状況が開かれそうにも見える昨今である。そのときに、大量生産品としての集成材に、安定品質を求めて量的な需要の拡大を見込むとともに、その脇で、自然材についても、今までよりは流通に乗りやすくなってくることを期待する。

伝統木構造がすばらしいからと言って、ただその形式を保存するだけに意味があるのではない。一方で社会の要求も異なれば、生活の仕方も異なるし、新しい技術や工夫も生まれてくる。そんな中で、木という自然の生んだすばらしい材料の特質を生かし、伝統として引き継がれた知恵の意味を理解したうえで、建築に魅力を与える構造架構を生み出す力を、読者が自分の心と頭で大いに引き出してほしい。

かんだ じゅん
日本大学理工学部建築学科　特任教授
東京大学　名誉教授